
咆哮の轟く星空の夜に。

確認のためいっておきますが僕どらえもんじゃないです。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咆哮の轟く星空の夜に。

【Nコード】

N9019S

【作者名】

確認のためいっておきますが僕どらえもんじゃありません。

【あらすじ】

龍童沙紀は小さいころからおかしな夢をよく見る。しかし、それが最近になると、より、リアリティが増し、見る頻度も高くなっていた。

夢の中で沙紀は巨大な白銀と青の混じった龍になる。そして楓という名の法師を背に寄せ、禍々しい化物と空中戦を繰り広げる。星空の夜、楓の「さあ、行こうか。」という優しい声かけにより、五百は居るであろう闇の軍勢に向かい翼を躍らせる。楓と共に戦え

る喜びを噛み締めながら、咆哮を上げ、青白い巨大な炎を吐き出し、楓との連携で闇を燃やし尽くす。どちらが現実かわからないほど、鮮明な夢。祖父にそのことを相談してみると、龍童家の祖先は龍と人間のハーフだと聞かされる。覚醒した龍の血。楓は過去に精神を強制転移させられ、歴史の闇へと身を投じるのであった。

悠久の輝き（前書き）

プロローグです

悠久の輝き

雲一つない澄み渡った星空の荒野に一組の龍と法師がいた。

地面は荒れ果て、地獄そのものな大地とは対照的に、空の闇は透き通った水晶のようにひどく美しく、月と星の光は傷だらけの彼らを絵画のように映し出した。

「ふう、終わったようね。無事に帰れたかしら。」

（サキエル、サキエルなのかい？よかった、言えないかと思ったよ。あのサキエル、俺はお前の背中に乗れて幸せだ。こんなに誇れることは、他に何一つない。今までありがとう。）

照れくさそうに楓は言った。愛おしい白銀蒼の龍の頬を、さっきまで痛みで動かなかった腕で、いや全身で温めながら。

「ずっと見てたわよ、あなたたちの勇姿。それにそれは私のセリフよ。私の背中を安心して預けられるのは楓だけ。あなたは最高のパートナーよ……愛してるわ。」

楓の鼓膜を揺らす龍の声は、とても優しく、ゆっくりとされていて、包まれるように穏やかだった。

（さあ、行こうか。）

そう楓が意思を送ると、龍は小さく喉を鳴らし、楓を背に寄せ、星空に吸い込まれるように登っていった。彼らの顔はとても穏やかで、透明であった。

混ざり会った光は雲を抜けて天に登り、その後大地にひとつの生命が産み落とされたのだった。

白銀蒼龍の記憶

龍童沙紀は、小さいころからおかしな夢を見る。

楓という法師の格好をした男を背に乗せ、なにやら化物と戦う夢である。

最近見る夢の鮮明さは、どちらが現実かの区別がつかないほどだった。

今夢から覚めたのか、それとも今からが夢なのか。

そんなことを考えてる間にも、朝は容赦なくやってきて、母親の逆鱗に触れるのだった。

景気良く開け放たれ、壁に打ち付けられるドア、毎度毎度壊れないで偉いなあ。

「いつまで寝てるの！！ 学校に遅刻するわよ、速く準備して朝食たべなさい。」

「はい。。」

どちらが現実なんてどうでもいい、龍の時は龍の時で頑張って戦わないと、死んじゃうし、今は今で準備しないと、お母さんに怒られて死んじゃうし。私にとってはどちらも現実だ。

はは、まだ寝ぼけてるや、どう考えてもこっちが現実。学校めんどうだなー。

そんなくだらないことを永遠考えながら、制服に着替え、寝癖を直

す。夢は夢だとはつきり気付くころに、リビングに向かい、少し冷えたがまだ暖かい朝食に手を伸ばす。

うちは娘の私と両親、それとおじいちゃん、の4人家族だ。おばあちゃん、私は私が生まれる前に死んでしまったらしい。

「おはよう、沙紀。」

「うん、おはよう。おじいちゃんもおはよー。」

「ああ、今日も沙紀はかわいいね。」

「もう、おじいちゃんったら、そうやって口ばかり。」

毎朝沙紀はおじいちゃんに褒められる。その口だけでなく心からいつているとわかる態度に、沙紀は小さな楽しみを感じていた。

「いただきます。」

「はい、どうぞ召し上がってくださいな。」

もくもくと食事をする父親と祖父。

父は朝しつかり食べるほうで、大きなオムライスを食べている。ケチャップで母にハートマークを書かれていたのが嬉しかったのだろうか、いつもより機嫌がよさそうだ。

私はトーストと目玉焼きを好んで食べる。毎朝人ごとに違うメニューを作ってくれる母には、まったく頭が上がらない。

ふと、沙紀は龍になった感覚を思い出した。虚空を駆け巡り、翼を

広げ、大きく咆哮する。背中にはいつも乗っている法師の存在。沙紀は導かれるように口を開いた。

「そういえば、最近不思議な夢を見るんだ。」

「ほう、どんな夢だい？」

白米と干物を食べながらおじいちゃんが聞いてきた。父も耳は傾けているようだった。

「あのね、私がおつきな龍になってるの。それで、鼻筋のとのつたかつこいい黒髪の方師を背中にのせて、妖怪とか化物とか鬼とかとにかくそういう悪そうなやつと戦う夢。」

でも不思議と怖くないんだ、背中に乗ってる法師の人が、なんだかすっごく心強くてさ。

「なんでだろうね。」

そういつて笑う沙紀を、今までみたことのない神妙な顔つきで、箸を止め、祖父は見つめた。

「その夢はいつから？」

父が聞いた。食事の間は基本寡黙を守る父から質問を貰えるとは思わなかったので、少し間が空いてから答えた。

「あ、えつと、ここ1週間ぐらい？ すんごい鮮明なんだ。」

まるで映画の中に入ったみたいで、風の匂いも、空を飛んでる時の空気の抵抗も感じるの。不思議だよ、ほんと。」

母は、またこの子は面白いこといつちゃって、といたげな顔で苦笑いをしていたが、父と祖父は違った。

短い沈黙がながれる。そして互いに顔を見合わせ、うなずいた。

祖父は張り詰めた空気を裂くように、口を開いた。

「沙紀、いまから言うことをよく聞きなさい。」

見たことのない真剣な祖父の表情に、生唾を飲み込み、うなずいた。

「我が龍童家は、代々龍の血をひいているといわれている。

祖先の始まりが、龍と人間の混血なんだ。

というのも、大昔の人が、天に登る龍のような光の塊をみつけてね、おかしいと思いその場所にいったら、赤子がいたそうさ。それを育ててくれたらしい。

その後、人間と龍のハーフといわれた神童は、人間と恋をし、子を宿した。龍の血は人間の交わるたびに薄れていき、いまでは、ほぼ無いといっても過言ではない。

私も息子も、もちろんその影響をほとんど感じたことがない。多少人より力が強くて、頭がいくらいだ。沙紀もそうだろう。私も今までそこまで本気で信じてはいなかった。

一応口伝なので、伝えてはいたが・・・まさか現実とは。」

たしかに沙紀は華奢な見た目と反して、高校生なのに成人男性より力があるし、勉強も授業中以外したことがないが、つねに学年トップで、地域でも一番偏差値の良い高校にかよっていた。

しかし、ただそれだけのことだ。

私が龍と人間の子の末裔？

にわかには信じられなかった。

「おじいちゃん、なに言ってるんですか。それに、たえそうだと
しても、沙紀が生きていくには関係のないことでしょ。変なこと言
わないで下さいよ。」

少しあわてて母が口を開いた。こんな話聞いたことがなかったらし
い。

「それがあるだよ、美紀さん。」

私たち親子には龍の記憶が一切ない。夢に出ることも、もちろんな
い。

しかし、沙紀にはあるようだ。なんらかの要因で龍の血が覚醒した
のだろう。

その夢の中の状態というのは、祖先の記憶かもしれん。

しかし、あまりにリンクしすぎている。もしその夢の中で龍の沙紀
が戦死するようなことがあれば……」

両親は息をのんだ。私は祖父の発言を鵜呑みにすることはできな
かった。

現実より現実味のある夢。

しかし、私が龍になっっているのには間違いないのだが、体を動かし、
発言しているのは、私ではなく祖先の龍自身だ。

正確にいうと、龍の感覚を共有している、という方がいいかもしれ

ない。

この龍の意志が祖先の意志から私の意志に切り替わったときに、戦死したら、現実の私も死ぬ。。
ありえない話ではない。

「おじいちゃん、どうしよう!」

沙紀が困惑の悲しみを叫ぶ瞬間、体は青白い光に包まれ、その場に倒れこんだ。

薄れていく意識の中、私の名前を叫ぶ家族の声が、頭の中をこたました。

沙紀が意識をとり戻した時には、すでに龍になっていた。

変わらない思い

巨大な森の端にある、洞窟の前。狩りにいつていた楓は、自分用の鳥と、パートナー用の猪を担いで、腹をすかして帰りをまつているであろうサキエルのもとに駆け寄った。

「サキエル、今日のご飯はごちそうだよ。夜は激しい戦闘になるだろうからね。おいしいもの食べて力をつけよう！」

楓は、まだ距離があつた比較的大きな声で話しかけた。しかし、意志表示はかえってこない。

風化した石像のようにピクリともしない。

「サキエル？おーい、どうした？具合でも悪いのかな？」

覗き込むように話しかける。

すると龍は、ハツと息をのみ、喉を鳴らした。

「ん・・・ あ、あなたは楓さん！ ですよ。 てことは私・・・ 精神ごとこつちの世界に来ちゃったってこと？ どうしよう！」

突然意味のわからないことを言い出したパートナーに困惑を隠せない楓。感情は表情に表れていた。

「何をいつてるんだい？ はは、サキエル、さては寝ぼけてるなあ。」

樹齢1000年の大木ほどの大きさのある翼をゆさぶり、焦りながら龍、いや沙紀は答えた。

「違っんです！ あ、あの実は私はサキエルさんじゃないんです。」

ごめんなさい、突然言っても信じてもらえないかもしれませんが、今の私は楓さんとサキエルさんの未来の孫の孫の孫の孫の孫の孫の孫の曾孫の玄孫ぐらいの孫の精神なんです！
体はサキエルさんですが・・・」

見たことのないぐらいあたふたしたサキエルに、楓は不覚にも可愛い、と思ってしまった。

普段冷静で、神殿のような神聖な雰囲気をもつ知的な存在。それが今ではまるで子供だ。

「と、なるとさ、今サキエルの体を支配しているのは、僕とサキエルの未来の子供の子孫ってこと？
信じられないなあ。

君は龍になったことを疑問に思っていないようだし。それになんで僕が楓っていう名前だとわかるの？
大体僕とサキエルは種族が違うから、子を成すことはできないのだけど・・・た、たしかに僕たちは愛し合ってるけどね。」

楓は頬を紅くそめていた。

「実は何度も戦闘中、私の意志はサキエルさんに支配されながらも確かにこの世界にいたのです。だから名前もわかって・・・それに祖先が龍だったという話を祖父から聞きました。」

少し落ち着いた口調で沙紀は説明した。うなづく法師。

「まあその話が本当だとして、君は未来に帰れるのかい？サキエルはもとに戻るのかなあ。
というか、明らかに性格も喋り方も違うし、きっと本当なんだろうけどね。うんうん、信じるよ。」

そういつて楓は困ったように微笑んだ。思ったよりあっさり状況を飲み込んでくれたことに、楓とサキエルの信頼関係の強さに感謝した。

「信じていただけのんですか？　ありがとうございます！　あ、でも、帰りたいんですが、帰り方がわからなくて・・・体の動かし方とかなら一緒に体感して慣れてるんで問題ないんですけど。」

「そうか、それは困ったね・・・そういえばサキエルの精神はどこにいつちゃったのかな。」

「多分サキエルさんの精神と意志はまだ私の中にいます。」

直接声は聞こえてきませんが、存在を感じることができるので、間違いないです、はい。」

「なるほど、まあサキエルが無事なら僕はなんでもいいや。でも困ったなあ、今日の夜に、闇の住人との最終決着をつけるつもりだったのに・・・いや、君を責めてるわけではないよ、不可抗力だったわけだし。」

でもどうしよう、一人で戦ってくるか。」

ぐるぐると同じところを歩きながら楓は呟く。しかしその眼光は鋭く、どこか遠くをとらえていた。

「わ、私多分戦えますよ！　戦闘ならサキエルさんの体で何度も体験してるし、体の動かし方もわかります。」

「しかし、体験といっても、意志を添えていただけなんだろう？　それにこの時代と無関係の君を巻き込むわけにはいかないよ。」

「一応私も龍の血を継いでいて、かなり濃いほうらしいので、身体能力も高かったですし、足手まといにはならないと思います。それに、多分楓さんが死んでしまうと、未来の私や家族もいなかったことになってしまうと思います・・・」
私のためにも是非協力させてください。」

その言葉には、強い意志が感じられた。サキエルに似た闘志を感じとった楓は、その申し出をありがたく受け取ることにした。

一通り状況説明が終わったあと、沙紀の腹が音をあげた。
法師がサキエルのためにもってきたのであるう食事をおもっていたので、せっかくなのでいただくことにした。
グロテスクな見た目をしていたわりには塩味がきいていて、まろやかな口どけだった。

「ごちそうさまでした、楓さん。おいしかったです。」

「うん、本当は人間だからお口に合うか不安だったけど、今の味覚は龍だもんね、良かった良かった。」

漫画肉に噛り付きながら楓は答えた。あぐらをかいて肉にかぶりつく姿は男らしくもあり、子供らしくもあった。沙紀は楓の性格が少しわかった気がした。

「えーと・・・」

指をこちらに向けながら、貧乏ゆすりをしている。沙紀は直感で、まだ名前を告げていないことを思い出した。

「そうだ！自己紹介がまだでしたね。あの、私、沙紀っていいいます。17歳です。」

「沙紀か、いい名前だ。たしかに、少し似ているね、いやそっくりだ。17歳とはこれまた若い・・・僕は 風鈴院 楓。22歳のおじさんだよ。見た目の通り、法師をやっている。サキエルとともに今は闇狩りをしてるから、最近はあまり人間の供養とかはしてやれてないけどね。」

海に沈む夕日を見る瞳で、楓は自分の左手を眺めた。その瞳には悲しみだけでなく、誓いを思わせる意志があった。

「そういえば、どうやってサキエルさんと出会ったんですか？」

「はは、やっぱり気になるよね。じゃあ、行動開始まで時間もあるし、すこし昔話でもしようか。」

不敵な笑みをうかべながら、楓は嬉嬉と過去を語りだしたのだった。

絶望

それは、楓が6歳の誕生日を迎えた日のことであった。

風鈴院家では6歳から厳しい修行がはじまる。食事などの作法はもちろん、法師としての仕事も、父親の颯^{ハヤテ}に付き添い、一人前になるための修行をおこなわなければならなかった。

滝行、座禅、体術、呼吸法、絶食、さまざまな修行が、幼い楓を蝕んだ。

中でも一番辛かったのが法術の修行だ。

法術など、でないからだ。他の修行は決められたメニューをこなせば終わった。

しかし、法術の修行は、無から有を生む、もともと神に近い行為。父は精神と肉体を極限までひとつにし、その術が存在することを強くイメージ出来たときに、法術は発生するといった。

「いいか、楓。法術つてのはそう簡単にできる技ではない。焦らず、しかし確実に修行を積むのだ。

他の修行もすべて法術に繋がっている。

心の鍛錬を怠らないように。」

厳しくも、春の日差しを思わす暖かい父の右手が、楓の頭をなでた。

「はい、父様。」

父にはすべてを見透かされてる。そう思うことが時々ある。

楓が虚無に襲われたときや、脱力感に苛まれたとき、かならず父は優しくアドバイスをくれた。

その的確なタイミングと、厳しくも子煩悩な両親のおかげで、楓はなんとか辛い修行に耐えることができた。

尊敬する父と同じ職につきたい、という念も、また楓を強く支えた。

「はは、まあ百聞は一見にしかず、だ。今から父さんが出す法術をよくみていなさい。」

そういつて、右手を前方に伸ばし、左手を右腕の肘に添えた。

森のざわめきが沈静化し始め、小鳥のさえずりが急に静まり返った。まるで、時をとめたようだ。

父の集中力は、肌で感じ取れるほどだった。

「がさいえんほうげき牙碎炎法撃！！」

空気が完全に凍った。そう思った瞬間、父が言霊を発した。

時は烈火のごとく動き出し、すさまじい熱気を感じた。

前方にある大木を、巨大な炎の牙が喰らいついた。

視界が赤く炎で埋め尽くされたことに気付いた時、すでに目の前の大木は、灰に変わっていた。

緊張の糸をといった父はいつもと同じように、楓に説いた。

「いいか楓、法術というのは、自分の肉体的なエネルギーを消費して無から有を生む技ではない。

脳内で再生したイメージを、現実呼び起こす技だ。

今父さんは、炎であの大木が包まれ、灰になる想像を強く、した。肉体と精神が一致し、言霊によりその力を増幅させて、法術を行ったんだ。わかるな。」

「はい、父様。」

「つまり、他の修行の成果が、この法術を左右するってことだ。一人前になるために頑張りなさい。

着実に修行を積みめば、いつか必ず法術は発動する、大丈夫、楓は私の息子だ。」

父が法術に長けた法師だということは聞いていたし、寺に妖怪が襲撃してきた時に、爺様と一緒に戦闘するところは遠目でみていた。しかし、極至近距離でみたソレは、楓の心を強く揺さぶった。畏怖さえ覚えるその威力、果たして使いこなせるだろうか。

その日から楓は、さらに修行に熱が入るようになった。

ハヤテ
楓には持病があったからだ。父が死んだあと、母様を守り、寺を継ぐのは私だ。

はやく一人前にならなくては、と。

しかし、楓の願いとは反して、一向に法術は発生しなかった。

肉体と精神を一致させ、法力によって身体能力を著しく向上させる技は身に付いた。しかし、放出系の法術は、どうあがいても身に付かなかった。

父とともに出かける妖怪退治も、魑魅魍魎どもを殴りとばす程度。妖怪や鬼、化物や影は、この世のものでは滅することはできない。放出系の法術、もしくは極限まで高められた体術（やはり、そこには法力を身に纏う必要があるのだが）を取得するしかなかった。

時は流れ、楓は15歳。父の持病はさらに悪化し、戦闘などは爺様が変わって行っていた。

「失礼します。」

すでに起き上がれなくなった父の部屋は、森林の香りがして、楓の気持ち落ち着かず。

精神修行の座禅も、この部屋でよく行っていた。

広い正方形の空間の中心に、布団を敷いて父は寝ていた。

しかし、その法力は健在で、父が寺にいただけで、妖怪共は敷居を踏むことすらできない。

楓の精神と肉体は、厳しい修行によりかなりのものになっていた。下級妖怪程度なら、ひとひねりにできる。

だが、やはり法術を使用することはできなかった。

しかし、中級妖怪以上になると訳が違う。

肉体による直接攻撃では限界があった。

なぜ、私には法術の才がここまでないのだろう。何が足りない。何をしたらよいんだ。

楓の焦りは限界に達していた。

「楓。」

震える声で、楓の鼓膜を振動させる。

「はい、父様。」

「すさまじい修行をしているな。見事な肉体と精神状態だ。私が15の時には、そのような力、もっていなかったよ。」

唇を噛み締め、楓は言った。

「しかしっ……。しかし私は法術を使役できません。これでは、父の跡目になるどころか、母様を守ることすら。お年の爺様を働かせてしまうような私など！……………」

「取り乱すでない。すべての法は冷静沈着な心から生まれる。精神の修行を積んだ楓なら、わかってのことだろう。

それに、爺様の件は、楓の責任ではない。本来ならまだ私が働くべき時期だ。すまない思いをさせている。」

「父様……。声を荒げてしまい、申し訳ありませんでした。失礼します。」

私は馬鹿だ。大馬鹿だ。父様の前で情けない姿を見せた上、恥まがかかせてしまった。どうしたらよいのだ。

修行内容をさらに厳しくしたが、人間としての格が上がるばかりで、法師としては見習いにもなれなかった。

楓、16歳夏、父、颯が逝去した。

楓が誰よりも努力していることをわかっている母様や爺様は、責めることなどしなかった。

罵ってほしかった。

お前のせいだ、と。代々続くこの寺も、もうおしまいだ、と。

優しさが、ただ、怖かった。

死のう。この世に俺は必要ない。これ以上生きても自分の無力に苦しむだけだ。

亡者より亡者らしく、魂の抜けた楓は食糧も水も持たずに、フラフラと樹海の闇へ、足を運んだ。

翼を見つけた少年

もう楓はなにも考えていなかった。自分が今、歩いているのか、止まっているのかもわからない。

ただ、死に向かって進んでいる実感だけが、楓の足を無意識に進めた。

歩き続けて5日目。厳しい修行や絶食の成果で、楓は一向に痩せ衰えなかった。

常任なら飲まず食わず寝ずで歩き続ければ、間違いなく死んでいるだろう。

生きたいと願わなくても、鋼となった楓の肉体と精神は、死ぬことさえ許されなかった。

太陽が沈み登る。これの10回目を見届けたとき、楓はある巨大な洞窟にいた。

まるで鍾乳洞のような祠を見つけた時、楓はここを私の墓にしようと思った。

リーン、リーンと空気の鳴る音甲高いがする。青白く輝く突起した岩の数々。

太陽の光が届かないはずなのに、その発光する岩のおかげで、辺りを見渡すことができた。

その美しさに感動はしたが、生への執着はおこらなかった。

神がくれた最後の贈り物。

ありがたく頂こう。

しばらく、といっても2日以上だが歩き続け、楓は最深部についた。

より一層広いその空間に寝そべり、楓は死を待つことにした。

さすがの楓も17日間寝ずに進み続け、死を予感していた。

両親や爺様のことを思い出す。しかし、生きようとは思わなかった。

父様、ふがいない私をお許しください。最後に懺悔し、そして思考をやめた。

「あら、こんなところに客人とは。珍しいこともあったものね。それにここは人間ごときには立ち入れない聖域のはずなのに。」

楓は目を疑った。そして思った、ついに幻覚と幻聴か、と。
なんせ目の前には、この世のものとは思えないほど美しい、龍の姿があつたからだ。

一切傷のない、ダイヤの輝きをもつ青い龍鱗、すべての生物を凌駕する圧倒的な質力と威厳。
均整のとれたフォルム。

しなやかで透き通るような巨大な翼。そして水晶を超越するすべてを見通すおおきな瞳。
存在自体が芸術だった。

「あ、あなたは一体……」

起き上がる力のない楓は、倒れたまま声を振り絞り話しかけた。

「それはこっちのセリフよ。ここは私の聖域。勝手に侵しといて、いい御身分なこと。

なぜあなたはここに？」

「わからない……死のうと思い、歩き続け、気付いたらここにいました。

勝手に入ってしまったい申し訳ない。」

「死、ね。人間とはやはり愚か。自ら生を絶つことを望むなんて。信じられないわ。

生物は今日を生き抜くために必死だというのに。

中途半端に食物連鎖の上位にたつと、勘違いしちゃうのかしら。」

あまりに神々しいその姿をみたとき、楓は思った。
まだ死にたくない、と。

絶望の塊になり、もぬけのからとなった楓の体を、熱い血液が巡り始めた。

「私は・・・私は 生きたい！」

朽ち果てた楓の体を淡い光が包み込む。枯れ果てた皮膚は水々しさをとりもどし、青い顔色は健康的な赤に染まった。水や食料などの補給は必要だが、何より生への執着が楓を突き動かした。

「なるほど、法師だったのね。どうりで。それも、かなりの腕の。若いのに立派ね。」

「あなたのおかげだ！ 私は今まで法術を使えなかった。それが突然回復法術を使えるようになった。」

私の生への執着が、肉体と精神を一致させ、言霊により発動したのだろう。

何度感謝しても足りない。

私の名前は風鈴院 楓。もし名があるならお聞かせ願いたい。」

頭を地面にこすりつけ、涙を流しながら感謝した。その光景を龍は理解できずに見つめていた。

「私は何もしてないわ。あなたが勝手に」

楓は龍の言葉を遮った。

「それでも、だ！あなたの美しく、神々しい姿に私は感動した。絶望しかなかった私に、あなたは光をくれた。」

このまま死んでいれば、私は罪人として一生地獄で身を焼かれていただろう。

この命、あなたのために使うことを約束する！」

「普通の人間より少し上等だからといって、私になにか貢献できると思っただけだよ。」

あなたに出来ることは何もないわ。」

下等に人間風情になにができる。宝石より美しい龍は人間を見下した。

「ならばより修行する。私にも法術が使えることがわかったのだ。どんな修行にも耐えてみせる。あなたのために使える命になるように、私はこの魂を燃やそう。」

それが私の生きる理由だ。ありがとう、ありがとう！」

その日から、楓はたびたび龍のもとへ訪れるようになった。爺様も寺で余生をすごし、母は結界内で安心して暮らす。

楓はみるみるうちに立派な法師となっていた。

始めは龍に煙たがられていた楓も、様々な献上物や、紳士な態度に、次第に心を許すようになった。

若くして父を超えた法力を得たが、楓は修行を怠らなかった。

命の恩人である龍に少しでも恩返しをしたいからである。

また、龍にした約束を守りたかった。なにができるかはわからないが、何か出来ることが生まれたときに、力になれるのは嫌だったからである。

楓は18歳の時、すでに日本で最強の法師といわれるようになった。海を割り、大地を砕く。底知れぬ精神力と体力。どんな強大な妖怪でも、楓にすれば赤子同然だった。

しかし、そんな危険因子を、闇の住人が許すはずがなかった。妖怪というのは、人間の思念や情が結晶化し生み出される、人間の産物。

だが、闇の住人は違う。

闇の住人とは、おもに鬼のことである。鬼は、人類が存在する大昔から君臨し、今でも人間よりはるか上位の存在として、恐れられている。

鬼も鬼で、虫ケラ同然の人間にいちいち干渉することはなかった。たまに食糧や水を奪われたりする程度だ。鬼の領域には、人間は決して干渉しない。

また、妖怪の中にも鬼と等しい力を手にするものもいた。九尾狐や、牛鬼などである。

人間と仲良くしている本来高等種である龍も許されなかった。普段は鬼や妖怪が攻め入ったときのみ迎撃していたが、サキエルも楓に意識がいつていた。また、私のせいで鬼に狙われてしまったという罪悪感もあり、二人は協力して、闇に抗うことを選んだ。

決戦の上空へ

「と、まあこんなところだよ。」

楓は申し訳なさそうに言った。

「そうだったんですか・・・これから鬼達との決戦だというのに、なんかすいません。」

「なあに、君のせいじゃないさ。それじゃ、ボチボチいきますか。大丈夫、さっきは不安がらせるようなことをいったけども、僕はこう見えても強い。守ってみせるよ。」

そよ風が髪を揺らし、爽やかな微笑みを彩った。一切の不安を払拭させるその表情に、心臓が高揚した。

「はい、お、お願いします！」

巨大な首を下げ、礼をした。と同時に、楓は沙紀の首にまたがり、両の手を添えた。

「今から法力を注ぐ。すこしびっくりするかもしれないが、安心してくれ。」

「はい！」

楓は呼吸をとめ、両の手に神経を集中させた。黄色の光が楓の体からあふれ出し、やがて肩を伝い手のひらに向かった。

「んっ……」

「痛いかな？」

「いえ、大丈夫です。」

「よかった。では……はあ!!」

掛け声とともに勢いを増した光は龍の全身を包みこんだ。黄色だった光は龍の体に混ざり、やがて藍色に変化し、発光した。

「これで多少の攻撃ははじき返すはずだよ。でかいのが来たら僕が直接防御の術を発動する。沙紀ちゃんは指示通りに動いて、攻撃してくれ。」

「ありがとうございます。わかりました。」

「では、いざ出陣といこうじゃないか!!」

一寸先も闇

「今夜は風が気持ち良いなあ。星も綺麗だ、雲ひとつない。」

「ほんとですね。これから命をかけて戦うとは思えません・・・」

「本当にいいのかい？やっぱり引き返したほうがいいんじゃないかな。いくら僕が強いといっても、確実に怪我をさせないでいられる保障はないからね。」

「いえ、たぶんもとの世界に戻るには、この戦いが鍵になっているんだと思います。何度も夢で経験しているシーンだと思いますし。」

「なるほどね。わかった。僕もなるべく防御に徹するよ。おっと、やつこさんのお見えだ。ふふふ。さあ、いこうか。」

「はい！」

洞窟から飛び出し、星を楽しむ余裕はほとんどなく、闇の大群にいきついた。音速に近い速度で飛行可能なこの体だからこぞできる技だ。地響きのような咆哮を轟かせ、密集しすぎて単体では見分けのつかない鬼達を威嚇した。熱い何かが首の辺りに溜まってくる。大きく口をあけ、息を吐いたと同時に、巨大な火の玉が鬼を包みこむ。密集した黒の塊は黒い炎を吐き出し、攻撃してきた。

「沙紀ちゃん、いい調子だよ。このペースで頼む！さっき君にかけた法術なら、群れている下級鬼の鬼火ぐらい掻き消せるはずだ。安心して焼き尽くしてくれ。」

「はい！」

巨大な翼から巻き起こす疾風が鬼の体を切り裂く。鋭い爪で引き裂く。絶え間なく続く火炎放射によって、空中を覆っていた下級鬼は瞬く間に蹴散らされた。

「沙紀ちゃんほんとに学生だったの？すごすぎだよ。でも無理しないでね。」

「何度も夢で経験してましたから・・・サキエルさんの動きが体に染み付いてます。」

「なるほどね、こりゃあ僕の心配は必要なかったかな。とつとボスのほうもかたずけてしまおう。」

「はい！」

二人が安心したのも束の間、大群の中核から、より一層巨大でおぞましい鬼が5体現れた。

「おっと、こいつは気が抜けないのが来たな・・・さっきのように鬼の攻撃を一切無視して攻撃してたら身がもたない。僕の指示に耳を傾けてくれ。心に直接かたりかけることもある。信用してくれ。」

「わ、わかりました。」

中級鬼は巨大な鬼火を吐き出してきた。あれにあたったらまずい。戦闘経験がない沙紀も、生物の勘で気づかされた。

「沙紀ちゃん、右上空に回避、同時に火炎の準備！」

巨体を振りかざし熱を喉にためる。しかし、鬼の一体が棍棒を回避先で大きく振り上げ、待機していた。しまった、やられる。そのとき、楓の意思が届いた。

（口を鬼に向けて！僕を信じて。）

「大地よ、我の声を聞き、我に従え。折り重なる鉄壁で我を守れ。」

龍の顔面に振り下ろされた棍棒は、楓の作り出した鉄の壁にさえぎられた。鉄をたたく鈍い音が聞こえたとき、強く圧縮された熱の塊が、鬼を包みこんだ。その後ろにいた鬼2体を巻き込み、灰に変えた。

（まだ鬼の攻撃は続いている、前方に加速！）

楓の意思が伝わり、瞬時に翼を羽ばたかせた。刹那まで沙紀がいた場所には残りの2体が総攻撃していた。一瞬でも行動がおくれていたら、肉塊にされていただろう。

「右手に祈りを、左手に誓いを。送る花束は200、我が声を聞きたまえ風の精霊シルフィ、その力をもってすべてを切り裂け！」

龍大きく翻り、鬼に向け両手を向けた。掌から200の風の刃が現れ、鬼を細切れにした。

「よし！大丈夫かい、沙紀ちゃん。」

「はい、危ないところでした。」

「はは、とっさに行動に移せると信じていたよ。」

「心臓は4つくらいに増えてる気分ですが・・・」

「そいつぁ高鳴りすぎだ、怖かったね。すまない。」

「いえ、お役に立ててうれしいです、がんばります!」

不安や緊張、恐怖がないといったら嘘になる。しかし、それ以上に安心と期待にこたえたいという気持ちがあっただけだ。無傷でここまでこれたのも、楓の援護あつてのこと。信頼をおくにはお互い十分だった。

精神の先

しかし、焼き尽くした煙や、引き裂いた肉が闇の核に集まりはじめる。

時空がかすかに歪み、いやな空気がたちこめた。空気が薄まり、息苦しい。暗闇の中から姿を現した鬼は、すさまじい覇気を放っていた。

「楓さん・・・」

震える声で安心をもとめた。声が聞きたい、ただそれだけ。

「気を引き締めていこう。やつが鬼の王、いわゆる上級鬼だ。」

鬼はゆっくりとした口調で、低い声を響かせる。

「貴様、我らと同じ高等種に位置する龍だというのに、人間など虫ケラと手を組みおって。恥を感じないようだな。いいだろう、消し潰してやる。ハッ！！！」

圧縮された空気の玉が、何十にも張り巡らされた守りの光を砕き、龍の体に直撃した。

「くっ、はやいな。沙紀ちゃん、大丈夫？」

「ちょっと痛いけど大丈夫です、指示を！」

「上に！接近戦はまずい、遠距離から攻撃していこう。」

大きく上空に身を躍らせる。電撃が鬼の角から発生し、襲い掛かった。

楓は大きく腕を電撃に向け、直撃寸前のところで、法力によって打ち消す。

（もつと離れて。詠唱する時間を稼がせてくれ。）

「ち、人間ごときに我が雷いかずちを消されるとは。龍の力ありきだとしても、少しなめていたようだな。」

鬼は体を丸く縮めた。大きく反動をつけて大の字になると同時に、圧縮された闇の塊が、楓たちに直進してきた。

（あれはくらうとまずい、下方に飛んで。）

時空を歪ませながら迫る衝撃波を、間一髪のところまで避ける。

「甘いわ！」

鬼の叫びとともに、衝撃波は砕け散り、方向をかえて散弾のように沙紀達を襲った。

「きゃああああああああああ！」

痛みという痛みが体中を駆け巡る、しかし闘志の炎は喉に溜まっていった。

さきほどから詠唱を続けていた楓が力強く両手を鬼にむけた。

「破壊の神シヴァよ！我が精神と血を今捧げん。その力を具現し、闇を打ち消せ！」

楓の体中を紫色の光を覆い、激しく膨張した。やがて光は手の先に集まり、音速を超え解き放たれた。

「ふんっ。」

しかし、鬼の気による防御壁が何十にも重なり、掻き消されてしま
う。

（いまだ！！！！）

長い時間チャージされた太陽に近い火球は鬼を捕らえた。

「くっ・・・ぐあああああああああああああ！！」

しかし、焼かれた身のまま、鬼は接近してきた。風をまとい、こぶ
しが沙紀の右翼みぎよくを貫く。今まで感じたことのない痛みが沙紀を襲つ
た。さらに闇の塊を足にやどし、蹴り上げてきた。楓は龍の体をと
びだし、防御壁をだしてうけとめた。しかし、直撃は避けられても
衝撃は楓を襲い、腕と肋骨が砕けた。

沙紀は痛む体を無理やり叩き起こし、落下していく楓をうけとめた。
翼を失い、うまく飛べない。

地べたに這い蹲り、痛みに嘆いた。鬼も身を焼かれながら落下し、
大地に身を打った。

沙紀はあまりの痛みに気絶し、動かなくなってしまった。楓は龍に
触れたかったが、肋骨がくだけていたため動けなかった。

「治療の神よ、彼女に千の恵みを。」

かすれる喉を引き絞り、龍に回復法術をかける。しかし、沙紀は目
を覚まさない。絶望が楓を襲った。

しかし、すぐに殺気に気付き振り向いた。ゆつくりと鬼が立ち上がり、こちらにむかってくる。

楓は度重なる技の連続で、力をほぼ失っていた。精霊や神を使役する大技を短時間で連発したのも大きい。最後の一撃をうつべく悲鳴を上げるからだを鞭打ち、詠唱する。

「大地よ、我が声を聞き、我に従え。鋭利なる棘をもって、闇を貫け。」

鬼の体を大地から飛び出す岩石の槍が突き刺した。しかし、鬼はフラフラとこちらに向かってくる。もはや奴に意識はなかった。ただ、殺意によって体がつき動かされているようだった。目の前にきた鬼はにやりと口角を上げ腕を振り上げた。

サキエルと沙紀ちゃんだけは守らねば……。体をもって鬼の体をうけようとする。

（楓さん、伏せて！）

大きく口を開き龍は炎を吐き出した。楓は伏せるといふより、倒れこむように地面に抱きついた。

地獄の業火が鬼を包みこむ。やがて灰になり、塵となって風に運ばれた。

龍は再び目を閉じたのだった。

誕生

（沙紀ちゃん！沙紀ちゃん！）

楓は地面に伏しながら意思を送り続けた。しかし返事はない。

楓の魔法により、砕け散った翼は再生しているが、全身に負った戦いの傷跡までは治せなかった。

僕は、世界で一番大切な人を失ってしまった。絶望という絶望が楓の心を蝕んだ。

今までのことが走馬灯する。闇に眼をつけられてからの鬼と共に戦う日々。

信頼と恋愛感情の狭間で悶々として、大切にしていることは伝えられても、世界で一番必要としていて、愛していることを伝えられなかった悔しさ。精神だけが、自分たちの争いには直接関係ない沙紀ちゃんを死なせてしまった自分への怒り。感情が逆流し、頭を叩き潰してくる。

大粒の涙を流し、またいつかのようになり大地に伏せ、死を待った。

俺もはやくサキエルのところにかせてくれ。この苦悩から開放してくれ。

しかし、死を望んでしまっている時点で、サキエルには会えないことに気付く。

俺はあの日から何にも成長していなかったのか。サキエルがいないと、こんなにも無能で、未熟で、子供なのか。

あらゆる葛藤が楓を突き刺す。すべてを神に懺悔し、無の心に戻した。しかし、あふれ出す涙はとまらなかった。

絶え間なく涙を流していたとき、龍の体から発光する少女が抜け出していった。

ありがとうございました。そう口を動かしているように見えた。

沙紀ちゃんが現世に戻れたのか。悲しみの涙が喜びの涙にかわった。
直後、龍はサキエルとして眼を覚ます。

二人の魂は溶け合い、愛を誓うのだった。

誕生（後書き）

一話のシーンに戻ると最後の詳細がわかります。

再開　くエピソードく

突然倒れこんだ沙紀を布団に寝かせ、家族は囲むように祈り続けた。
いた。

しかし、再会はあることなく訪れた。

「んっ・・・あ、ここは・・・」

「沙紀、沙紀なのかい？　ああ、よかった、一時はどうなるかと。」
安堵の空気に家族は包まれた。思いのほか心配してないようにみえて、沙紀は少し驚いた。

「大事な娘が突然気絶したのに、以外とみんな反応薄いね・・・」

「まあ、まだ5分しかたつてないからな。」

いそいそと仕事に向かう準備をしながら父が言った。

「5分？　それだけ？　うわー、私命がけで楓さんと一緒に鬼と戦ってたんだよ。」

「よくやった、よくやったぞ沙紀い！！！」

「うわ、おじいちゃん泣きすぎ。5分なのに。」

「さ、学校にいきなさい。」

「はい。」

沙紀は通学路を走った。さっきまでのことが嘘のようだ。

あのまがましい鬼は、現代にもいるのだろうか。いや、一番えらそうなの私たちが倒したし、大丈夫だね。考え事をしながら角をまがったとき、勢いよく人と接触事故をおこした。

「痛ったたたた。ごめんなさい。」

「すいません、あの、大丈夫ですか？」

そよ風が少年の髪を揺らし、爽やかな微笑みを彩った。

再開　くエピソードく（後書き）

最後に出会った少年は言うまでもなく楓の今世での姿です。沙紀はサキエルの今世での姿です。

サキエルと楓によって産み落とされた子供のずっと先の孫としてサキエルが転生し、楓もどこかで転生し再びであつたわけですね。運命のいたずらつてやつです。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9019s/>

咆哮の轟く星空の夜に。

2011年8月30日16時30分発行